

流れが肩ない川

白石 壮

「ねえ、もうつく？」

楽しみにしていた川遊び。川遊びは、生まれ

て初めてだった。だから、つい親をせぎたこ

てしまった。

ついた。ついてすぐ、サンダルをはきなが

らそっと入った。

「おくは流れが入いから気をつけて。あとす

へるからねー。ほんとに流されるよ。」

川に入。ていないお母さんがさげんだ。流れ

が速くても平気だと思。てしま。ていたほく

は、とんとんおくにいった。すると、急に転

んてしまった。流れに足をとられて、顔を石

にぶつけた。立って歩いてもとろうとした。

しかし、石がすべるすべる。

「いたい。」

何度も転んだ。ひ。しまった。また、石にし

がみついた。そのとき。足が何かにくすくす

れた。後ろには、つりをしている人しかいな

い。でもたしかにさわれた。今度はつめに
何かがあつた。もう一度ふり向くと、サン
ダルが片っぽぬげかけていた。もとそうと手
をのばしたときに、サンダルは流れにのつて
にげていった。当たつた。お母さんの予言か
当たつた。すべてその通りになつたのだから。
そして、サンダルはあきらめや、このことで
陸についた。少し笑われてしまつた。

このときのことを経験して、人の話を無視
しないことが大切だと思つた。なぜなら、自
分がそもそも知らないのに他人の知識を自分
の頭に入れておかないのは、かと同じで、た
たかめる危機があるのに血をすうようなこと
だ。だから、初めてすること、危険なことを
するとともに、その対応のしかたを覚えること
が大切である。